



月刊 第 589 号

照りも照ったり

降りも降ったり

今年の夏の天気は何とも気まぐれで何か自然が不機嫌に暴れまくっていると言う印象を受け。じりじりと照りつつけるかと思えば突然の豪雨に雷のおまけ付きで車のワイパーも効か

い程の降りようで各地での折角の夏のイベントも翻弄され寺泊でもサマーフェスティバルは途中中止の憂き目。お千代さんこと島倉千代子がメインゲストと言

うことでオールドファンは前日

から場所取りで大童、それに上杉香緒里は野積の孫と言うことで親戚縁者つれづれが声援に駆けつけ会場の海岸公園のステージ広場は今途がない人出約六千人の観客が詰めかけた。

昼の間はカンカンの上天気夕方から民謡団体の町内での流しの踊りが始まり次第に夜の歌謡ショー、民謡踊りへの熱気が高揚してゆく中何となく空模様

が怪しくなり遠雷が聞こえ始め最高潮と言う所で突然の雨、それでも観客は敷物を屋根代りに御当人も豪雨の中で熱唱、歌

手は観客の熱心さに感激、観客は歌手の高価な着物が濡れるのを心配しつつもそのプロ根性に感激、感激交流の中「人生いろ

いろ」を唱い切つての中断となり民謡踊りは中止となったが残念な思いは残りつつも思い出深い催しであったに違いない。

結果論ではあるが翌日の花火大会は絶好のコンディションの中で盛況裏に夜空を彩り、逆でなくて良かったねと言うのが全町民一致しての感想であった。

そんな天候の中でも夏の花々は確実に咲きついでゆく。春の花は散り急ぐ花が多いのに比べ夏の花は咲きつつける花が多いように思われる。初夏の陽射し

を待って凌霄花が一斉に朱色の花を輝かせ一ヶ月近くも自己主張を続ける中それに負けじと百日紅があちこちで花房を競

始めまさに名の如く夏の間賑

やかな花である。そんな中で合飲の花は素知らぬ振りで涼し気に微風を集め、木槿は一日でしぼむ花ながら花の数では負けじと常に満開と言う印象を維持しつつける。この花は韓国の国花で白、紫、薄紅、白と丹色それに一重咲八重咲と種類も多く手入れも不要で性強く育て易いせい

か最近生垣など沢山植栽されている。お盆をさかんに軒端に秋海棠が咲き大輪の芙蓉がゆらゆらと大輪の花を挿らし始めると何となく夏も終りの感じとなる。暑い暑いと口説きつつも夏が終ることへの少し不安めいた淋しさは何なのだろうか。

惜春の言葉はあるが夏に對するそのような言葉は思い当た



日頃は人気のない墓場も、お盆となれば大変な賑わい。疎遠になっていたご先祖の方々との出遇いと同時に、顔見知り同志はつつい話もはずむ。



八月一日と七日は盆参(ほんさん)で、大勢が寺の石段を昇る。読経とお説教の後、おときとなる。新盆に当る家族は親戚一同と共に団体参加となる。(聖徳寺客殿)



寺泊小学校は今春本山小、野積小を迎えての統合に伴い夏休み中に大改修工事が始まった。体育館は対震強化工事。安全安心を目指しての工事である。

ない。子供の頃のやり残しの宿題や毎日の天気書き込み欄の空白等々の事が深く脳にすり込まれてその束縛から未だ脱れ切れない精なのだろうか。

夏休みの思い出

さとうのぶひと

はち切れんばかりの暑い日が続いています。強烈な太陽光線のもと、外へ飛び出すには勇氣のいる歳になって。海水パンツ一枚、裸足で熱砂の上を走り回ったのは「まぼろし」だったのでしょか。



寺泊の花火は海中海空で名をあげた。その花火に向かって泳ぎ出そうとするアベック、こんなことは絶対やめて下さい。



夏祭りのミコシ、カグラが各町内低迷する中で、四区の子供ミコシは意気軒昂。神社でお祓いのあと町内を元気に練り歩く。



雨に降られる中、やさしい素振りに似合わぬプロ根性で熱唱する鳥倉千代子さん。帯も着物も高価な品だろうと観客は心配。

上がったてすぐ、両手の指を開いて胸に当て、前のめりに熱砂にうつぶせになると、指の形があらばら骨のように胸に浮き上がります。どのくらいきれいに浮き上がるかを競った時代があった。何ものにも代え難い至福の一瞬でした。

中学生の生意気盛りになると、砂浜のある海で泳ぎませんでした。灯台や「よこぜ」の外海の岩場で泳いだものです。日に焼けて黒くなるのが自慢話になり、腕から背中にかけて皮膚のむけることが夏の勲章でした。天気予報で紫外線注意報の出る昨今とはえらい違いです。

アサリが食べたくなると磯町の海岸の砂場へ出かけ、遠浅の海で足先の感覚をたよりに海底の砂をまさぐったものでした。腕の届く浅瀬には手頃な大きさのものが見つかりません。胸まで浸かるくらいの深さがないと大きなアサリは採れなくて、砂場には流木がふんだんにありまう。火を焚いてアサリを並べ、口を開いたのから海水で洗って食べました。ほんのりと海水の塩味が付き、薫製のようなコクのある食味で。

こういう野趣あふれる海の幸の享受があったのです。夏、寺泊の海には食材がふんだんにあり、シロウトでも簡単に採れて、もちろん一人ではありませぬ。あれもこれも、年上の友達や同期の仲間と一緒に食べたのです。ひもじかったというのではなく、海での遊びの延長でして、アルコールの飲める歳に達していたなら、海辺の大宴会になっていたことでしょう。



頑張るお千代さんの熱唱に観客も応えて数物を雨よけにかぶって声援を送りつづける。その熱意にお千代さん大感激。



海水浴場は大賑わい、浜茶屋は閑散。
若者はテント、パラソルにクーラー持込み。
それにしても、ここはほんとに寺泊？



海水浴場脇のテント村は年々盛況。土日となれば100張以上の色とりどりのテントが乱立。トイレ、水道、買物便利で無料とくれば、かくもありなん。

這いになり、冷え切った身体を温めながら、学校の先輩、後輩の自然な交流がありました。テストや勉強のこと。面白い授業をする教師の話。はたまた教師のプライベートの穿鑿。友人関係の悩み。将来への不安。視界をさえぎる何ものもない広大な海原を眺めていると、隠し事のない赤裸々な自分をさらすことができました。灯台と「よこせ」は少年たちの社交の場でした。

水着姿の少女たちが眩しく見えたのもこの頃です。しかし、知らない顔ばかりでした。たまた中央海水浴場で泳ぐことがありましたが、同じ学校の女子生徒に会うことはめったにありませんでした。

ふだんはひっそりしている閉鎖的な街並みも、海水浴客の増加や親戚縁者の長逗留で賑わいました。あこがれの「都会的なもの」の一時的な流入を肌で感じる事ができました。夏の寺泊は妙に風通しがよくて。成人したのちも、夏になると意識の高揚感を抑えることができました。

せんでした。彼女らはどこで泳いでいたのでしょうか。今もって謎です。

夏休みには、東京の「いとこ」たちがやってきて、長逗留したものです。大学に入ったばかりの年長のいとこは、毎日のように灯台で泳ぎました。東京に住み、大学に行っているというだけで、このいとこには妙な存在感がありました。東京での生活、大学の様子。わくわくするような話にしつと耳を澄ませています。果ては宿題まで手伝っていました。

誌代御後援 (敬称略・順不同)	
東京都	菊池 正芳 金三千元
渡辺	弘 金五千元
佐藤	朝子 金五千元
齊藤	トシ 金五千元
外山	雅章 金五千元
清水	巴 金五千元
山野	眞弘 金五千元
川崎市	寛 金五千元
船橋市	見附市 長岡市
津市	石野 セツ 金三千元
武澤	矢部 規行 金三千元
	中村 ヤヨヒ 金五千元
	中村 信也 金五千元
	日野 史朗 金三千元
	八王子市 輝美 金三千元
	青梅市 和義 金三千元
	鴻巣市 彰英 金三千元
	新潟市 律子 金五千元
	白井 政治 金三千元
	山越 ムツ 金三千元
	川上 智子 金三千元
	林 満智子 金三千元
	佐藤 敬之助 金五千元
	前田 保郎 金五千元
	松田 光平 金三千元
	山岡 トヨ 金三千元
	小熊 千恵 金五千元
	柳下 祐二 金三千元
	善二 金五千元
	泉谷 善二 金五千元
	寺泊町
	玄川 徳子 金三千元
	納谷 圭司 金三千元
	松田 義治 金三千元
	早川 武治 金三千元
	竹内 基一 金三千元
	解良 俊雄 金三千元
	松井 萬穂 金三千元
	石井 和昭 金三千元
	星 哲実 金三千元
	渡辺 昭三 金三千元
	渡辺 哲夫 金三千元
	渡辺 美枝 金三千元
	佐藤 美隆 金三千元
	大平 栄一 金三千元
	野村 利郎 金三千元
	宮村 喜代 金三千元
	中川 喜代 金三千元
	長谷川 さき 金三千元

小波会八月句会詠草

兼題 白南風・鮎他当季

白南風や

沖を見つめる漁夫一人

水沢 蕉子

蒼色の

海輝けり群青忌

外山きよし

白南風や

梵鐘の音の吹かれくる

小島 温石

囲炉裏辺に

あるじと座る鮎の宿

小形 美代

胴長に

笠で鮎追う竿の列

能登 頑牛



浜公園に集う剣士達。県剣道連盟の夏季合宿が寺泊で開催され、今年で第41回。最終日には総決算の昇段審査が行われる。

繕いて

にぎわいもどる鮎の宿

竹内 霍山

釣り上げし

鮎の高さや雲の峰

小島 冬扇

友釣りとは

言ふも悲しき鮎の性

中村 流瓢

お芝居の

子役もかくや天花粉

外山 海子

台風過

えご取りにわく今朝の涙

江原 汀子

凌脊の

花鏡舌な昼下がり

大越碧水子



種まきの甲斐あって海岸一帯に月見草が沢山咲くようになった。月見草が似合うのは富士山だけでない。日本海にも似合う。

焼き鮎に

越乃寒梅効いて来し

加勢 白汀

山百合の

呉るる目覚めの静かなる

内藤 蓮子

あとがき

つい先日まで青々としていた田甫がお盆を境に稲穂をふくらませて一部は已に色づきはじめています。甫場整備され広々と広がる田甫は一見同じように見えながら一枚づつ微妙に色の変化があり成熟への熱気が伝わってくるようです。今年は気温の高い日がつづいたので稲の丈がのび過ぎて実入りが進むと倒伏が心配とのことではあるが、こ

れからは日に日に稲穂が垂れて豊かな実りの時を迎え、まさに瑞穂の国の名に適わしい光景となります。お盆で帰省していたなつかしい方々も已に帰られて寺泊町としての最後の夏も平常の顔に戻りつつありますが、柳田国男の「先祖の話」によれば我々日本人は死後家や周りにある山や森や丘にのぼって祖霊となり更に供養を受けて一定期間をへるとカミになることを信じてきたのであり、このカミはやがて正月や盆がくると里におりて村人を祝福するのであり、宗教心が薄らいでいると言われている現代日本人の心の奥にもそんな思いが残っており亡くなった肉親と盆の間は交流したい、そして死



已に総りの秋も近い。広々と広がる田甫には、日に日に稲穂が頭を垂れはじめています。コンバインのエンジン音が聞こえる日も間近。

毎月二十日発行
寺泊ふるさとだより

誌代税共(百円)

編集人 中 村 興 樹

発行人 新 潟 県 寺 泊 町

ふるさとだより

郵便番号 九四〇一二五〇二

ダイヤル局番 〇二五八七五

電話 二〇二一九番

振替番号 〇六〇一三二五七四五

印刷所 吉野印刷株式会社